

ハカタユリ (*Lilium brownii* var. *colchesteri*) の我が国への伝来および名称の由来に関する考察II

大久保, 敬
九州大学大学院農学研究院植物資源科学部門

<https://doi.org/10.15017/9844>

出版情報 : 九州大学大学院農学研究院学芸雑誌. 63 (1), pp.1-8, 2008-02-28. 九州大学大学院農学研究院
バージョン :
権利関係 :

ハカタユリ (*Lilium brownii* var. *colchesteri*) の我が国への伝来 および名称の由来に関する考察 II

大久保 敬*

九州大学大学院農学研究科植物資源科学部門農業植物科学講座園芸学研究室
(2007年10月23日受付, 2007年11月30日受理)

History of Brown's lily (Hakata lily, *Lilium brownii* var. *colchesteri*) in Japan II

Hiroshi OKUBO*

Laboratory of Horticultural Science, Division of Agricultural Botany,
Department of Plant Resources, Faculty of Agriculture,
Kyushu University, Fukuoka 812-8581, Japan

緒 言

中国を原産とするハカタユリ (*Lilium brownii* var. *colchesteri*) の我が国への伝来について、筆者は(1) 安土桃山時代 (1568-1600) に作られた能衣装「茶地百合御所車模様縫箔」の刺繍が形として、また、文字としては犬子集 (寛永10年, 1633) に収録されている俳句が最も古いハカタユリの記録であり、それ以上、記録を遡れないことから、ハカタユリは安土桃山時代に我が国に導入された、および、(2) 遺伝子分析の結果をもふまえて、伝達経路は中国→朝鮮半島→日本 (博多) と考えるのが最も合理的である、と考察し、清水 (1971) のいう、そして広く流布している「鎌倉時代渡来説」に疑問を呈した (大久保, 2006)。その後、前と同様、美術作品および文学作品等を中心にさらに調査を進めた。本報では新たに判明した点を、前の考察と併せ、特に、伝来の時代について考察する。

本報告では前報同様、ハカタユリが「いつ」、「どのように」我が国に導入されたかを明らかにすることを最大の目的としているが、資料を残すという観点から、調査中に新たに見いだしはしたが、やや新しく時代考証には直接つながらないと思われる諸資料も併せて記述している。また、題名は前報 (大久保, 2006) の続きとして同じ題名を引き継ぎ、そのIIとしたが、ハカタユリの名前の由来についてはすでに解決済みであ

るため、本報では取り上げていない。

調査結果および考察

1. 絵画

ハカタユリを描いたと思われる絵2点を新たに見いだした。一つは「風神雷神図」の作者として知られる俵屋宗達の作と伝えられている絵「芍薬と百合」で、米国ワシントンDCにあるスミソニアン研究所のフリーア美術館に収蔵されている (図1)。高さ約1メートル、幅約40センチほどの掛け軸に描かれた絵で、下の方にシャクヤクが、背後からユリが突き出たように描かれている。花をみると、形はラッパ型で基部は筒状、花径よりも花長が大きい、横向きに咲いている (一番上の花はまだ蕾の状態で上を向いている)、など、まさにいわゆるテッポウユリ型 (植物学的にはテッポウユリ亜属, Wilson, 1925) で、しかも、花が白色であること、さらに、へら状の葉の形 (大久保, 2006参照) などからこの「百合」はハカタユリであると判断できる。

宗達は生年、没年ともはっきりしない (一説では1560頃-1635頃) が、所有するフリーア美術館の資料にはこの絵は1568-1615の間の作と記されている。桃山時代 (1568-1600) の能衣装「茶地百合御所車模様縫箔」とほぼ同時代の作で、ハカタユリの「絵」としては前に紹介した (大久保, 2006)、寛永8年 (1631)

*Corresponding author (E-mail: hokubo@agr.kyushu-u.ac.jp)

の「籬草花図」（京都妙心寺天球院）（狩野山楽）より少なくとも15年ほど遡ることができる、もっとも古い資料である。しかも、「芍薬と百合」に描かれたユリのほうが「籬草花図」のユリに比べより写実的で、種の判断には好都合である。なお、塚本（1985）による



図1 「芍薬と百合」（1568-1615, 伝 俵屋宗達, フリーア美術館蔵）/Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington, D.C.: Gift of Charles Lang Freer, F1898.56

と、日本の絵画で、ユリが現れるのは室町時代末の「浜松図」（東京国立博物館）が最も古く、そこに描かれているのはヒメユリである。

もう1点は若冲の絵である。時代はかなり新しいが、前（大久保, 2006）に取り上げたのでここでも記す。そこで述べた、伊藤若冲の花丸図（金刀比羅宮奥書院）（明和元年, 1764）より20年ほど前、若冲30代なかばのころの作と思われる絵（日本の美術 No256に収録, 佐藤康宏, 1987）に「牡丹・百合図」（相国寺山外塔頭, 慈照寺（銀閣寺）蔵）がある。その中の「百合」は雄蕊が黒く描かれていて、ハカタユリを思わせる。ただし、葉の形からは判断できない。なお、この絵にムカゴは描かれていない（若冲の絵のムカゴについては前報（大久保, 2006）参照）。

2. 詩歌

(1) 俳諧

特に、初期の俳諧を重点的に調べた。「はかたゆり」を詠った句15（うち一つは犬子集に収められた句と同一）、廻文1および季語として出てくる書3点を新たにみつけた。

寛永19年（1642）の「鷹筑波集」に「鬼ゆりにくひつかれてやはかたゆり」、「鬼ゆりにかまれた跡かはかたゆり」の2句、続いて慶安4年（1651）の崑山集に「さかぬまや心づくしの博多ゆり」、「つぼみこそ枝につくしのはかた百合（正勝）」、「雨の足でふむやぼくりのはかた百合（直昌）」、「小刀や切りかねもものはかた百合（良利）」、「花をふむ鳥射落とすやはかた百合（正成）」、「置露はねり酒なりやはかた百合（正興）」の6句が現れる。このうちの最初の句は犬子集に収められている句と同一である。その5年後の明暦2年（1656）には「ゆめみ草」が出され、そこに1句「咲色やあらいつくしのはかた百合（次良）」と「どこにもおほく咲博多百合」という廻文が、また、寛文7年（1667）の「続山井」には「ゆかずして名所をみるやはかた百合（道之）」1句が収められている。元禄13年（1700）には「はたまはりほころびやすしはかたゆり」が、宝永元年（1704）の「国の花」には「すじがねを入れて甲や博多ゆり（梅之）」が現れ、さらに、享保17年（1732）の「文星観」には「碑の前に袂しほるや博多百合（吏舎）」と「舟に来る泪の枝や博多ゆり（閩州）」の2句をみることができる。年代が確定できなかったが、おそらく同じ頃の「鞠随筆」には「しらぬ火のもえたつ斗博多百合（図大）」と詠われている。

俳諧そのものではなくても、寛永13年（1638）に出

た「毛吹草」の巻第二誹諧四季之詞、正保4年(1647)の「増補卷山之井」の夏部ならびに寛文7年(1667)の「増山井」の四季之詞上夏にいわゆる「季語」として「はかたゆり」が挙げられている。

しかしながら、これらはすべて、犬子集(寛永10年, 1633)に収められた句「さかぬ間や心つくしの博多百合(貞継)」(前報, 大久保, 2006参照)よりあとの作で、「犬子集」より以前にさかのぼることはできなかった。俳書のはじまりは、元和年間(1615-1624)の「犬筑波集」(山崎宗鑑)で、江戸時代の俳諧撰集としては、「犬子集」の出版が最初である。そしてその「犬筑波集」に「はかたゆり」はでてこない。すなわち、出版された俳書ではこれ以上さかのぼれないことになる。

「俳諧」が「俳諧の連歌」の略称で、「滑稽」を意味し、もともと連歌の余興として詠まれるものであったことはよく知られている。したがって、時代を遡るには、連歌のなかに詠われているかを調べなければならない。

(2) 連歌

国際日本文化研究センターが有する資料の中に、連歌のデータベースがある。奈良工業高等専門学校の勢田勝郭教授が長年にわたって入力・蓄積され、寄託されたものであると同センターのホームページに紹介されている。私たちも利用できる。

称名寺連歌「つきはあき」(元弘2年, 1332)にはじまり永禄6年(1563)までのすべて、およびそれ以降、幕末までの主要な連歌作品、句数で197,228のなかに「ひめゆり」を詠った句は12で、種は特定できないが「ゆり」「さゆり」等を含む句をあわせると、全部で60句ほどあった。しかしながら、「はかたゆり」はまったく見いだせなかった。永禄6年(1563)までの連歌はすべて収録してあるということから、初期の連歌にハカタユリは登場しないと考えてよさそうである。

なお、勢田(2002)は同様に俳諧のデータベースも作成している。全データ25,652句の中に見いだされたのは、前報(大久保, 2006)で述べた新続犬筑波集(万治3年, 1660)の「美つくせり善やつくしのはかた百合」のみで、それ以外に「はかたゆり」を含む句はでてこない。対象作品は天文6年(1537)の「守武千句」が最も古く、次は正保4年(1647)の「正章千句」で、その間の作品が収録されていないことが原因である。俳諧のデータはまだ少ないようである。

(3) 和歌

前述の連歌同様、勢田(2002)による和歌のデータベース(勅撰集21すべてを含む私撰集および主要な私家集の和歌)190,423句にも「はかたゆり」は含まれていなかった。また、万葉集以降近世に至るまでの和歌を網羅的に収録したという角川書店発行の「新編国家大観」全巻(2003)にも「はかたゆり」の語句は見いだせなかった。

3. 華道書

今回新たに着目したのは華道書である。我が国独自の芸術である生け花は、室町中期、京都六角堂の僧侶、池坊による口伝に始まるといわれている。元禄期にはさまざまな伝書が出回り、華道として広がっていった歴史を持つ。幸いなことに昭和のはじめ頃、初期東山時代の代表的秘伝書をはじめ、江戸初期から幕末に至るまでの主な花道書を収録した「花道古書集成」(平田辰雄, 1930)が出版されていて、全文、全図みることができた。

天和4年(1684)、尋舊子が著した「立華正道集」のなかにはユリが多く登場する。「中上につかふ草木の事」の項に「..., おにゆり, ひめゆり, ささゆり, かのこゆり, はかたゆり, ...」と、また、そのすこし後の項目、「祝儀に嫌べき物の事」のなかに「..., 鬼ゆり, あたごゆり, ためともゆり, ...」があげられている。同じ年(貞享1年, 1684)(1684年は2月21日から貞享で、それまでは天和)の「抛入花傳書」(著者不明)には、切り花の水揚げについて書かれた部分、「根を火に焦して水をあぐる物」のなかに「博多百合, 本性白く黄にくろみあり是も水にて咲はまつ白なり」と解説してある。この書にはユリではほかに、さゆり(ささゆり), 紅(ひめ)百合, 相良百合, 為朝百合, 車ゆり, 姨百合, 總(すかし)百合がでてくる。その4年後、貞享5年(1688)に出た「立華指南」(著者名不明, 「淡路がた津名の住人」と書かれている)にも、百合草, 笹百合, 山丹(ひめゆりのふりがな), 相良ゆり, 博多ゆり, すかしゆり, 鬼ゆり, うたゆり(ためともゆりのことか?), 車ゆり, 緋ゆり, 姨ゆり, かのこゆり, かうらいゆり, あたごゆり, と数多くのユリがでてくる。

これらより時を遡ると、「立華正道集」の1年前、天和3年(1683)出版、池坊門葉の「立花大全」には、数カ所に「百合類」とのみ、巻三、「心に用る類ひの事」のなかに、「...右の外、為朝百合笹ゆり鹿子ゆり..等風情おもしろく....」が、「正心に用る類ひの事」に

姫百合が、また、巻四の「草木居所の事」に、鹿子百合、笹百合、すかしゆり、鬼百合、為朝百合がでてくるが、ハカタユリはない。さらに遡ってみると、「替花傳秘書」(年不詳)「十二月の花の事」に「六月一日の心は橘で、その下草にひめ百合が」と、また「祈祷のはなの事」に同じく「ひめ百合」がでてくるが他のユリはない。天文11年(1542)の「池坊専應口傳」では「百合」としかでてこないし、さらにそれ以前の「仙傳抄」(富阿弥、発刊年は諸説あって不詳、文安2年(1445)説が最古であるが、「花道古書集成」(平田辰雄、1930)には「信じ得られざる事に属する物と思ふ」とある。我が国最古の花伝書といわれている)、および「義政公御成式目」(「仙傳抄」の後半部分と考えられている、「花道古書集成」では別立てになっている)には、もともと出てくる植物の数が少ないこともあるが、「百合」はみあたらない。

再び時代を下ってみてみると、「立花便覧」(元禄8年、1695)には、「置花生之事」、「籠花生之事」の2カ所にそれぞれ「はかた百合」、「はかたゆり」と、また、享保2年(1717)の「華道全書」には「はかたゆり」と説明がついた挿絵をみることができる。さらに、「生花正意四季之友」(寛延4年、1751)では「茶の会には茶の花沈丁花為朝百合はかたゆり等のはなはたにほいあるものは生べからず但すかし百合ひめゆりはくるしからず」とある。

以上のように、華道の世界においてもハカタユリはかなりポピュラーであったらしいことがわかるが、「犬子集」(寛永10年、1633)より古い記述は華道書にもみつからなかった。華道書におけるハカタユリの初出は1684年のようである。

4. 祭りうた

三重県に水沢野田(すいざわのだ)という町がある。現在は四日市市に含まれているが、戦国期の天正17年(1589)鈴鹿野郡峰城主岡本下野守家憲の臣下であった黒田治助が13人の農民と共に開発し、その長男を庄屋としてつくったと伝えられる由緒ある村である(著者、年不明)。水沢野田町愛宕神社で毎年10月9日におこなわれる秋の大祭(太鼓踊り)でうたわれるうたの一つに「お伊勢」があり、そのなかに「春は花垣梅の香いに桜花、夏はばたんの紅白に、ふじ百合ひめ百合はかた百合」とハカタユリが登場する(ふじ百合とは何かわからない)。

現在の当主、黒田治夫氏に直接尋ねた。氏によると、文禄3年(1594)の検地で高十石の赦免を受けて愛宕

大権現を勧請し、神事が行われていることから、お祭り自体はそれよりあとに始まったと考えられる(黒田治夫、2007、私信)。また、その当時の文書は残っておらず、現存の文書は江戸時代末期か明治初期のものである。ハカタユリが詠われた詞章の成立年代は確定できなかったが、それは1595年より後であることは確かである。

5. 遊女「たえ」

遊女・遊郭年表(著者不明、2001)によると、博多柳町(現在、福岡市博多区大博町)に遊里ができたのは天正18年(1590)、秀吉が全国を統一した年である。前(大久保、2006)に述べた石城志(明和2年、1765)の記述、すなわち、「いにしへ、唐人入津せし時、遊女「たえ」といふ者に、持来りてあたへし故、たへゆりといへり。其後、博多より諸國に廣まりければ、世に博多ゆりと云」が正しければ、ハカタユリの伝来はこの年以降ということになる。遊郭が開業する以前にも、「歩き巫女」「熊野比丘尼」「辻君・立君」と呼称される遊女がすでに存在していた(著者不明、2001)ので、それ以前の可能性ももちろんあるが、話として残っていることや、相手が外国人であることなどを考えると、やはり管理された遊郭での出来事と考えた方がいいような気がする。この年表の同じ年の1590年には「博多の遊女屋が長崎に進出し、南蛮人相手の遊郭を開業した」という記述もある(この年表には1593年にも同じ項目が書かれていて、これが正しいのではないかと思われる)。

「たえ」の話は石城志以外にはなく、また、石城志の成立がかなりあとになってからのことであることを考えると、断定には躊躇せざるを得ないが、敢えていうならば、1590年から1600年までの10年のあいだにハカタユリは伝わったのではないかと思われる。

6. テッポウユリとハカタユリ

ハカタユリが中国原産であるのに対し、テッポウユリ(*Lilium longiflorum*)は琉球列島に自生する(台湾の一部にも自生)、いわば、我が国原産のユリである。意外に感じられるが、京都や江戸でテッポウユリが知られるようになったのはハカタユリよりも遅いのではないかと思われる。清水(1971)によると「鉄砲百合」という名が最初に書かれたのは曾占春の「本草綱目纂疏」(寛政10年、1798)であり、それ以前は琉球(花壇地錦抄、元禄8年、1695)、琉球百合(雨露慧苑、宝永4年、1707; 広益地錦抄、享保4年、1719)、

琉球ゆり（大和本草，宝永6年，1709），薩摩百合（大和本草，宝永6年，1709；草木図説，文久2年，1862）などとしてでてくるといふ。文字として最初にあらわれたハカタユリよりも60年以上遅い。花壇綱目（天和元年，1681）にも琉球百合がでていいるが、「赤色」とあることから，テッポウユリのことではない。

俳書にあたってみると，先述の「毛吹草」（寛永13年，1638）では「鬼百合，車ゆり，はかたゆり」，「増補卷山之井」（正保4年，1647）では「百合」として「さゆり，姫ゆり，鬼ゆり，はかたゆり，車ゆり」が，そして「増山井」（寛文7年，1667）には「百合」の項目に「姫ゆり，さゆり花，鬼ゆり，博多ゆり，かのこゆり，車ゆり」が出てくるが，「さつまゆり」をはじめとするテッポウユリを表す語はまったくでてこない。前報（大久保，2006）で紹介した俳諧初学抄（寛永18年，1641）でも，出てくるのは「鬼百合，博多百合」のみである。また，上述の多くの華道書にも「さつまゆり」，「琉球ゆり」はまったく出てこない。

そうであれば，塚本（1985，1989）のような論議は不要で，江戸の初期あるいはそれ以前に描かれている横向き，筒状，白花のユリはテッポウユリであるはずがなく，それはハカタユリであるといえる。

テッポウユリは入ったものの，すでにあるハカタユリと花の形が似ているために，混同され，テッポウユリもハカタユリの名前で呼ばれていた可能性は考えられる。前（大久保，2006）にも述べたように，ハカタユリの別名としてサツマユリがある（本田ら，1984；著者不明，1969）のもそういう理由からかもしれない。

7. 結論

以上のことを，前報を含め，総合して考えると，やはり一点に行きつくように思われる。すなわち，ハカタユリは安土桃山時代に我が国にもたらされた。

このような調査では「ある」ということの証明はひとつでも探し出しさえできれば容易であるが，「否定」の証明は不可能である。すなわち，「鎌倉時代渡來說」を完全に否定することはできない。ただ，ここまで探して，室町や鎌倉時代に伝わったことを示す証拠はいまだに何一つみつけだせないのは事実である。

8. 年表について

本調査で明らかになった事実を書き加え，新たにハカタユリ関連年表（改訂版）を作成した。本報告中には出てこないが，前報（大久保，2006）で関連があるとして含めた事項は本表にもそのまま含めている。本表からもわかるように，筆者の調査で明らかになっただけでも，年代がはっきりしている1631年から江戸時代の終わりの1847年まで，ほぼ7年に1回，享保の終わりの1735年までに限ると，4.5年に1回「ハカタユリ」が何らかの形で出ていることがわかる（同一年の事項は1回として計算した。個々に数えて計算すると，それぞれ約5年および3.3年に1件となる）。古い時代を重点的に調べたため，後のほうの資料がまばらになったのか，実際そうなのかは判断できないが，頻度は江戸前期のほうに偏っているようである。とはいえ，江戸時代を通してハカタユリが広く愛でられていたのは確かであるといえよう。

表1 ハカタユリ関連年表—改訂版（明治まで）

西暦	年号	事項（[] は中国の書物）
78-140		[南都賦（張衡）]
452-536		[神農本草經（陶弘景）]
759	天平宝字3	博多の文字初出（続日本紀）
945-960頃		[四時纂要（韓鄂）]
1195	建久6	聖福寺創立（栄西）
1206頃		[居家必要事類全集（著者不詳）]
1241	仁治2	うどん，そばの製法博多に伝来（聖一国師）
1406		[救荒本草（朱棣）]
1542	天文11	池坊専應口傳（池坊専應） ¹
1568-1600		茶地百合御所車模様縫箔（東京国立博物館，作者不明，能衣装，刺繍）★
1568-1615		芍薬と百合（フリーア美術館，伝 俵屋宗達，掛け軸，絵）★
1590		博多柳町（現，福岡市博多区大博町）に遊里が開業
1590		[本草綱目（李時珍）]
1592	文禄1	文禄の役（壬辰倭乱）
1597	慶長2	慶長の役（丁酉の再乱）
1607	慶長12	第1回朝鮮通信使

1615-1624	元和	犬筑波集 (山崎宗鑑)
1631	寛永 8	籬草花図 (京都妙心寺天球院, 狩野山楽, 襖絵) ★
1633	寛永10	「さかぬ間や心つくしの博多百合」(貞継, 犬子集) ★
1635	寛永12	武家諸法度制定
1638	寛永13	毛吹草 卷第二誹諧四季之詞★
1639		[農政全書 (徐光啓)]
1641	寛永18	俳諧初学抄 (齋藤徳元) ★
1642	寛永19	「鬼ゆりにくひつかれてやはかたゆり」(鷹筑波集) ★ 「鬼ゆりにかまれた跡かはかたゆり」(鷹筑波集) ★
1647	正保 4	増補卷山之井 夏部★
1651	慶安 4	「さかぬまや心づくしの博多ゆり」崑山集★ 「つぼみこそ枝につくしのはかた百合」(大阪 仏師正勝, 崑山集) ★ 「雨の足でふむやぼくりのはかた百合」(秦 直昌, 崑山集) ★ 「小刀や切りかねもとののはかた百合」(伊藤 良利, 崑山集) ★ 「花をふむ鳥射落とすやはかた百合」(斉木 正成, 崑山集) ★ 「置露はねり酒なりやはかた百合」(石田 正奥, 崑山集) ★
1656	明暦 2	「咲色やあらいつくしのはかた百合」(大阪 次良, ゆめみ草) ★ 「どこにもおほく咲博多百合」(ゆめみ草) ★
1660	万治 3	「美つくせり善やつくしのはかた百合」(如空, 新続犬筑波集) ★
1667	寛文 7	「ゆかずして名所をみるやはかた百合」(道之, 続山井) ★ 増山井 四季之詞 上 夏★
1678	延宝 6	博多百合 (井原西鶴撰俳諧集) ★
1681	延宝 9	花壇綱目 (水野元勝) ★
1683	天和 3	立花大全 (池坊門葉)
1684	天和 4	立華正道集 (尋舊子) ★
	貞享 1 ²	抛入花傳書 (著者不明) ★
1688	貞享 5	立華指南 (淡路がた津名の住人) ★
1694	元禄 7	花譜 (貝原益軒)
1695	元禄 8	花壇地錦抄 (伊藤伊兵衛 (三之丞)) ★ 立花便覧 (松領山題) ★
1697	元禄10	農業全書 (宮崎安貞)
1700	元禄13	「はたまはりほころびやすしはかたゆり」(住吉御田植) ★
1703	元禄16	筑前國統風土記 (貝原益軒) 献上▲3
1704	宝永 1	「すじがねを入れて甲や博多ゆり」(梅之, 国の花) ★ 菜譜 (貝原益軒)
1706	宝永 3	百花ノ譜 (森川許六) ★
1707	宝永 4	雨露慧苑 (狩野友庵)
1709	宝永 6	大和本草 (貝原益軒)
1712	正徳 2	和漢三才図絵 (寺島良安) ★
1717	享保 2	華道全書 (伊丹屋新兵衛・伊丹屋忠兵衛) ★
1719	享保 4	広益地錦抄 (伊藤伊兵衛 (政武))
1732	享保17	「碑の前に袂しほるや博多百合」(史會, 文星観) ★ 「舟に来る泪の枝や博多ゆり」(閩州, 文星観) ★
1738	元文 3	筑前國産物帳 (竹田定之進・小野玄林) ★
1750頃?	寛延 3頃?	牡丹・百合図 (伊藤若冲) ★
1751	寛延 4	生花正意四季之友 (西村源六・渋川清右衛門・中川茂兵衛) ★
1764	明和 1	第11回朝鮮通信使 花丸図 (金刀比羅宮奥書院, 伊藤若冲, 絵) ★ 石城志 (津田元頼・元貫) ★
1765	明和 2	
1798	寛政10	筑前國統風土記附録 (加藤一純・鷹取周成) ★ 本草綱目纂疏 (曾占春)
1800	寛政12	花卉図天井画 (京都信行寺, 伊藤若冲, 絵) ★
1808	文化 5	詩歌連俳季寄註解 改正月令博物筌 (鳥飼洞齋) ★
1821	文政 4	夏秋草図屏風 (酒井抱一) ★
1824	文政 7	「御祭りや鬼ゆり姫ゆりはかたゆり」(小林一茶, 文政句帖) ★

1836	天保7	緒鞭会結成(馬場大助, 黒田斉清)
1843	天保14	江馬活堂, 黒田斉清邸訪問
1844	弘化1	本草図譜(岩崎灌園)完結 ⁴ ★
1847	弘化4	百花培養集(松平菖翁・左金吾)★
1848		[植物名実図考(呉其濬)]
1861	文久1	皇女和宮御降嫁
1862	文久2	草木図説(飯沼慾齋)
1894	明治27	百合鑑(井上龍太郎)★
1895	明治28	百合及除虫蟲菊栽培録(池田次郎吉)★
1900	明治33	新四君子(長島久造(編))★
1911	明治44	重要輸出農作物全書百合之巻(一斗散人(編))★

★: 文字, 図あるいは絵からハカタユリと確認できる日本の資料, ☆: ハカタユリらしいと考えられる日本の資料.

¹多説あり, この年を否定する学者もいる. ²1684年は2月21日から貞享で, それ以前は天和. ³完成は1709年. ⁴1820に序, 1829に最初の一巻, 1830に巻五(首巻)から巻十まで刊行. その後残巻が出版. ハカタユリは巻五一.

以上のほかに, 年代が確定できないために上表に書き込めない資料は,

- (1) 「しらぬ火のもえたつ博多百合」圖大(鞠随筆)★(1730年あたりと思われる)
 - (2) 替花傳秘書(年, 著者不詳)(「花道古書集成」(平田辰雄, 1930)の収録順から判断して, 1683年「立花大全」以前, 1542「池坊専應口傳」以降)
 - (3) 仙傳抄(含義政公御成式目)(年不詳)富阿弥(1445説が最古であるが, 疑問が持たれている)
 - (4) 三重県四日市市水沢野田町愛宕神社秋祭り詞章★
- の4点.

9. 付記 - 前および本調査について

本調査でも国立国会図書館をはじめいくつかの図書館, 博物館, 美術館等に出かけて資料を探し, 確認する作業をおこなった. しかしながら, 前報および本報で引用した文献のうちの多くは, 実は, 筆者の研究室の向かいに立つ九州大学附属図書館で読むことができたのである. この事実は非常に重く, 九大図書館の蔵書の充実ぶりにあらためて感心したことを銘記しておきたい. いうまでもなく, 九州大学が誇るべき, 守るべき, そしてさらに発展させるべき宝物である. 蔵書の中には, まだまだ「博多百合」の文字が見いだされないまま眠っているかもしれない.

要 約

安土桃山時代(1568-1600)に作られた能衣装「茶地百合御所車模様縫箔」に刺繍されているユリもしくは1568年から1615年の間の, 俵屋宗達の作と伝えられている絵「芍薬と百合」に描かれているユリが最も古いハカタユリの形としての記録であり, 文字としては犬子集(1633)に収録されている俳句である. 現在までのところ, これ以上は歴史を遡れない. すなわち, ハカタユリは安土桃山時代に我が国に渡来したと考えられる.

文 献

- 淡路がた津名の住人 1688 立華指南(平田辰雄(編) 1930 花道古書集成, 大日本華道会, 東京 より引用, 以下*印)
- 著者不明 1684 抛入花傳書(*)
- 著者不明 1969 *Lilium* L. (リリウム属) ユリ属 最新園芸大辞典. 誠文堂新光社, 東京, 1508-1544 頁
- 著者不明 2001 遊女・遊郭年表. <http://www.ne.jp/asahi/kiwameru/kyo/history/yuujiyo.htm>
- 著者不明 年不明 鞠随筆(正岡子規(編) 1928 分類俳句全集第六巻, アルス, 東京 より引用)
- 著者不明 年不明 替花傳秘書(*)
- 著者不明 年不明 文書名不明. <http://www.cty-net.ne.jp/~syunji-k/tiikid.htm>
- 富阿弥 年不明 仙傳抄(*)
- 平田辰雄(編) 1930 花道古書集成, 大日本華道会, 東京
- 尋菡子 1684 立華正道集(*)
- 本田正次・林 弥栄・古里和夫(監修) 1984 原色園芸植物大圖鑑. 北隆館, 東京, 581頁
- 池坊門葉 1683 立花大全(*)
- 池坊専應 1542 池坊専應口傳(*)
- 伊丹屋新兵衛・伊丹屋忠兵衛 1717 華道全書(*)
- 鶏冠井令徳(編) 1651 崑山集(古典俳文学大系 CD-ROM 版編集委員会(編) 2004 古典俳文学大系 CD-ROM 版 集英社, 東京 より引用, 以下○印)

- 各務支考 1704 国の花 (○)
 影山休安 1656 ゆめみ草 (○)
 北村季吟 1647 増補卷山之井 (○)
 北村季吟 1667 増山井 (○)
 北村湖春 (編) 1667 続山井 (○)
 古典俳文学大系 CD-ROM 版編集委員会 (編) 2004
 古典俳文学大系 CD-ROM 版 集英社, 東京
 正岡子規 (編) 1928 分類俳句全集第六卷, アルス,
 東京
 松江重頼 (撰) 1638 毛吹草 (○)
 松江重頼 (編) 1633 犬子集
 松領山題 1695 立花便覧 (*)
 水野元勝 1681 花壇綱目
 西村源六・渋川清右衛門・中川茂兵衛 1751 生花正
 意四季之友 (*)
 大久保敬 2006 ハカタユリ (*Lilium brownii* var.
colchesteri) の我が国への伝来および名称の由来
 に関する考察. 九大農学芸誌, 61: 145-163
 齋藤徳元 1641 俳諧初学抄
 佐藤康宏 1987 伊藤若冲. 日本の美術, 第256号
 仙石廬元坊 1732 文星観 (正岡子規 (編) 1928
 分類俳句全集第六卷, アルス, 東京より引用)
 勢田勝郭 2002 短歌データベース. 国際日本文化研
 究センター
 勢田勝郭 2002 俳諧データベース. 国際日本文化研
 究センター
 勢田勝郭 2002 連歌データベース. 国際日本文化研
 究センター
 清水基夫 1971 日本のユリ. 誠文堂新光社, 東京
 新編国歌大観編集委員会 (編) 2003 新編国歌大観
 CD-ROM 版. 角川書店, 東京
 津田元願・津田元貫 1765 石城志
 塚本洋太郎 1985 私の花美術館. 朝日新聞社, 東京
 塚本洋太郎 1989 美術に現れたユリ. 園芸植物大辞
 典 5, 小学館, 東京, 210-211頁
 Wilson, E.H. 1925 *The Lilies of Eastern Asia*.
 Dulau and Company Ltd., London
 山本西武 (編) 1642 鷹筑波集 (○)
 山崎宗鑑 1615-1624 犬筑波集

Summary

History of Brown's lily (Hakata lily, *Lilium brownii* var. *colchesteri*) in Japan was again discussed based on the further survey of old fine arts, fabrics and literature. Design of lily and court-cow-carriage patterns on "Noh" costume or a painting entitled "Peonies and lilies" (Attributed to Tawaraya Sotatsu) is the oldest image of Hakata lily. The oldest literature in which the word "Hakata lily" was found is a book of Haiku poems of 1633. It is considered that the lily was introduced into Japan in the era of Azuchimomoyama (1568-1600).